

## 三人称の語りについての一考察 — William Faulkner の “Dry September”

中西典子

### 1. はじめに

“Dry September” は、William Faulkner の短編小説の中で代表的な作品の1つである。この作品は1931年に *Scribner's* から出版されたが、Hans H. Skei はこの作品が書かれた時期を次のように推測している。Faulkner が1927年2月18日に Horace Liveright へ出した手紙の中で、「私は同時に2つのことを行なっています、つまり、長編小説と私の町の人たちに関する短編小説集です」<sup>1)</sup> (Blotner 34) と述べていることから、作家がこの時書いていた短編小説を Faulkner の「町の人びとについての物語」である“A Rose for Emily”と“Dry September”ではないかと考えている。つまり、これらの作品は1926年か27年に書かれていたのではないかと。さらに、タイプ原稿に記入されているページ番号から考えて、“As I Lay Dying”、“Once Aboard the Luger”、“Idyll in the Desert”の原稿も、「私の町の人たちに関する短編小説集」のためにこの頃作成されたのではないかというのだ (Skei 26 - 27)。

作家が小説を書く時にどのような語り手を採用するかは、どのような小説を書きたいかによって左右されると考えられる。1926年か27年頃に書かれたと推測される作品の語り方を見てみると、“Dry September”<sup>2)</sup> は三人称の語りであるが、“A Rose for Emily”<sup>3)</sup> は「私たち」という一人称複数形で語り手が語っている。17ページのタイプ原稿の“As I Lay Dying”<sup>4)</sup> は「地の文の説明や客観描写」のない村人たちの会話体だけで語られ (小山 236 - 37)、“Once Aboard the Luger”<sup>5)</sup> はさまざまな手書きやタイプ原稿が残されているようだが、最初の頃のものと思われる原稿では「テンポの早い会話中心の物語」となっており (小山 50 - 52)、“Idyll in the Desert”<sup>6)</sup> では郵便配達人が聞き手の「私」に語る体裁をとっている。Faulkner はこれらの作品の中でさまざまなタイプの語り方を試している。興味深いことに、上記のタイプ原稿のように、“Dry September”の第1部では、理髪店にいる男たちの何人かが後から入ってきた男によってランチへと駆り立てられていく様子が、登場人物の会話が主に話の推進力となっていくように描かれている。それに対して第2部と第4部では、黒人に陵辱されたという噂を流したらしい白人女性 Minnie Cooper について、そしてランチが行われた夕方の彼女の様子について町の人たちや彼女の女友だちの視点を交えて語られている。“Dry September”には、この時期に作家が試みていた会話体で話を進める方法と、“A Rose for Emily”のような町の人たちの視点を取り入れているが、三人称の語りを採用されている。

三人称の語りで書かれている“Dry September”は、いわゆる全知の語りで語られているので、語り手についての考察はあまりなされてきていないように思われる。ジェラルド・ジュネットは、一部の例外を挙げながらも<sup>7)</sup>、「語り手は自己の物語言説においては『一人称』としてしか存在しえな

い」(ジュネット 286)と述べている。小説を書く時に作家が選択するのは、「物語内容を語らせるにあたって、『作中人物』の一人を選ぶか、それともその物語内容には登場しない語り手を選ぶか、という選択」(ジュネット 287)である。“Dry September”は、物語内容には登場しない語り手が物語の外から語っている。語り手が登場人物を呼ぶ時、その呼び方に一貫性がない。語り手は、リンチ事件の犠牲になる黒人男性 Will Mayes のことは、初めに “a Negro” (169) と呼び、その後は “the Negro” (177 - 79) と呼ぶが、一度だけ “the Negro Mayes” (176) とその名前を呼ぶ。理髪店にいる何人かの理髪師の名前は決して呼ばない。語り手は Hawkshaw のことを最初に “a barber” (169) と呼んだ後は “the barber” と呼び続けてその名前は一度も口にしない。また、他の理髪師については、“a second barber” (169) は次に “the second speaker” (170) と呼ばれた後、“the speaker” (170)、そして “the second” (171) と呼ばれる。理髪師の “a third” (171) は次に “the third speaker” (171) と呼ばれ、彼がリンチに向かう途中には “the other ex-soldier” (176) と呼ばれ、その次からは “the soldier” (176) と呼ばれる。理髪店に来ていた客の一人は “a client” (169) と呼ばれた後、“the client” (170) と呼ばれその次からは “the drummer” (171) と呼ばれる。また、客の中の 1 人の青年は “a hulking youth” (169) と呼ばれた後、“the youth” (170 - 71) と呼ばれ、白人男性 McLendon が理髪店に現れた後は Butch とその名前で呼ばれる。McLendon は店に現れた時から一貫して名前で呼ばれる。読者にとっては誰がしゃべっていて、店の中に理髪師と客がそれぞれ何人いるのかが非常にわかりにくい。理髪師の呼び方が一度目と二度目に呼ぶ時では呼び方が違うことについて、Theresa M. Towner と James B. Carothers は「誰が話しているのかを正確に突き止めるのが難しいと、物語についての不安が強まる」(101)と説明している。確かに、その場の不穏な雰囲気演出するのに功を奏していると考えられる。語り手が名前を呼んでいるのはリンチに向かった男たちであるが、それでも理髪師の名前は言いたくないように感じられる。三番目に話し出した理髪師がリンチに向かう途中に元兵士という素性を明かされると、彼は「兵士」と呼ばれるようになるが、彼の名前は最後まで呼ばれることはない。語り手は、McLendon と Butch は個人として客観的に対象化しているが、理髪師たちのことは彼らほど強く客観化していないように思われ、語り手は彼らよりも理髪師に近い立場から語っているように考えられるのではないだろうか。このように考えると、この全知の語り手は、何らかの考えのもとに意図的に物語を語っているように思われる。そこで、物語論の三人称視点の語りについての考え方を手掛かりにして、この短編小説の語り手の姿勢について、さらに、三人称の語りがこの物語に採用された理由を考察していく。

## 2. 三人称視点の語り

物語理論において、「視点」の意味が曖昧な形で用いられてきたことはジュネットたちナラトロジストたちによって指摘されてきたが、山岡實は『「語り」の記号論—日英比較物語文分析〈増補版〉』の中で、「視点」の問題と「物語る声」の問題がナラトロジストの間でどのように混同されてきたかを解明し、これらの問題の混同を解消する方法を提唱している(5-25)。山岡は、「視点」とは「物語世界の出来事・状況を物語世界の現場で『見ている』点」を意味し、それを担う主体は登場人物であるとし、「観点」とは「物語世界の出来事・状況を物語世界外から『見ている』点」を意味し、それを担う主体は語り手であるとする。また、「物語る声」とは「物語世界の出来事・状況を読者に

伝達する媒体としての物語る声」を意味し、その声を発する主体は語り手であると定義する（23 – 24）。そしてこれらの「視点」と「観点」は、「物理的・概念的・関与的」（23）に見ることができることとする。つまり、従来の「視点」を、登場人物が見ている「視点」と、語り手が見ている「観点」に分類し、さらに、語り手の「物語る声」を分離したのだ。

登場人物が見たり、考えたりするような、その人物の「視点」の支配する状況が描かれていない場合、語り手が物語世界の外から自らの「観点」を通して語っていることになる。例えば、“Dry September”の冒頭で、理髪店での会話が描かれるまでの記述は、語り手の発している声が聞こえていることになる。このような語り手の声から語り手のどのような姿勢が読み取れるかを検証していく。

### 3. 会話中心の語り

“Dry September”は、短いながらも、2つの話を交互に進めていく対位法で描かれている。1つ目の話は、ある噂話が発端になってリンチ事件が起こる経緯が奇数の部分で語られる。第1部は会話が物語の推進力となっているが、冒頭では語り手が自らの「観点」から語っている。

Through the bloody September twilight, aftermath of sixty-two rainless days, it had gone like a fire in dry grass—the rumor, the story, whatever it was. Something about Miss Minnie Cooper and a Negro. Attacked, insulted, frightened: none of them, gathered in the barber shop on that Saturday evening where the ceiling fan stirred, without freshening it, the vitiated air, sending back upon them, in recurrent surges of stale pomade and lotion, their own stale breath and odors, knew exactly what had happened. (169)

語り手はこの共同体で起こったリンチ事件を見た後、過去形で語り出している。“twilight”を修飾する形容詞に“red”ではなくて“bloody”を使っているのは、明らかに、これから語っていく物語の中で起こるリンチ事件を暗示していると考えられる。62日間雨が降らずに空気が乾燥しきった中で、乾燥した草の中で火が燃えていくように噂が広がっていくという比喩は、その炎が示す赤さと共に、枯草に燃え移る早さ、枯草を燃え尽くしてしまう炎の圧倒的な破壊力を暗示し、語り手はこの直喩によって噂の持つ威力を伝えようとしている。しかし、アメリカ南部の共同体の情報交換の場でもある理髪店にいる男たちの誰もが、白人女性 Minnie が黒人男性に陵辱されたという噂話の真相を知らないという事実を事件の顛末を語る前に伝えている。語り手は、このような噂話だけで悲惨な事件が起こってしまう南部の土壌を伝えようとしているのではないだろうか。

理髪店での理髪師と客の間の会話は、もっぱらこの噂話が本当かどうか、つまり、Minnie が黒人に本当に襲われたかどうか、つまり、Minnie が本当のことを言っているかどうかについて交わされる。語り手は登場人物の心の中深くまでは入っていかず、人物の簡潔な客観描写と会話を伝えている。そこから読み取れることは、噂の黒人をよく知っている Hawkshaw は、40歳前で未婚の Minnie の言うことは信用しておらず、Will Mayes はそのようなことをする人物ではないと弁護するが、青年 Butch は白人女性の言ったことを信用しない Hawkshaw に反発し、客の行商人も Butch と同じ

考えであるということだ。Butch も行商人も黒人の言うことよりも白人女性の言うことを信じるという立場である。2 人目の理髪師が噂の真相を突き止める時間は十分あると言うのに対して、行商人が彼に北部へ帰ったらどうかと言い、理髪師が自分はこの町で生まれ育ったという話をしている時の Butch の様子は次のように語られている。

He looked about with a strained, baffled gaze, as if he was trying to remember what it was he wanted to say or to do. (171)

理髪師たちが真相を突き止めるのが先だと言うことに反発してはいるが、Butch には実際にどのような行動をとりたかまで考えが及んでいないことを、語り手は説明している。そこへ、McLendon が入ってくる。語り手は、McLendon に関する情報、つまり、彼が第 1 次大戦の時にフランスの前線で部隊を指揮していて武功章を受けていたことを語る。その後は McLendon の外見や行動や発言が語られるが、彼の考えや気持ちが説明されることは一切なく、客観的に対象化されている。彼は噂が本当に起こった事柄かどうかを考慮することもせずに、彼と一緒に来る人を募る。地の文でも会話の中でも、決して「リンチ」という言葉は語られることはないが、McLendon は指揮官が部下を眺め回すような目つきで、「おれと一緒に来るのは誰だ?」とか、「おれと一緒に来る者はみんな立ち上がってくれ。そうでない奴は…」とその場にいる人たちを脅すように言い放つ (171)。McLendon が登場すると一層緊迫感が増して、Butch や行商人や理髪師が彼の行動に巻き込まれていく様子が短い会話と簡潔な客観描写によって語られていく。

McLendon と何人かの男たちが店から出て行った後、網戸が彼らの後ろで大きな音を立てて鳴り響くが、語り手はその時の店の中の停滞した空気を “the dead air” と表現する (173)。さらに、その後 Hawkshaw も彼らの後を追うが、店に残っている理髪師に、「できるだけ早く戻るよ」と言った後、「(こんなことを起こ) させるわけにはいかない」と言って走りながら出て行く (173)。二人の理髪師が網戸から身を乗り出して彼が出て行った道の方を見ている状況で、地の文で次のように語られる。

The air was flat and dead. It had a metallic taste at the base of the tongue. (173)

これらの文は、Hawkshaw が立ち去った後に取り残された理髪師たちが包まれている空気を説明している。再び “dead” という言葉を用いて死を暗示させながら、リンチに向かう男たちを止めようとして彼らを追って行った Hawkshaw を見送っている理髪師たちのやるせない苦々しい気持ちを語り手が代弁している。McLendon たちが出て行った後に取り残された理髪師たちを描くこの第 1 部の最後の部分は、第 3 部の象徴的な語り方を先取りしている。

#### 4. 象徴的な語り

第 1 部に続く第 3 部では、月や埃が象徴的に使われ、死を暗示する言葉も見られる。やはりここでも、「リンチ」という言葉は一切使われないが、暗闇の中で行われようとするリンチとそれを止め

ようとする Hawkshaw の姿が語られる。第3部冒頭は、Hawkshaw がリンチへ向かう男たちを追いかけている時の周りの情景を語り手が自らの「観点」から述べる。

The barber went swiftly up the street where the sparse lights, insect-swirled, glared in rigid and violent suspension in the lifeless air. The day had died in a pall of dust; above the darkened square, shrouded by the spent dust, the sky was as clear as the inside of a brass bell. Below the east was a rumor of the twice-waxed moon. (175)

Hawkshaw が足早に進んで行く道に立っている虫が群れる街灯の光が輝いている様子が語られるが、この場所の空気も「生気のない空気 (the lifeless air)」と表現される。辺りが暗くなっている中で、街灯の光がじっと動かずに宙に浮いているように見える様子を述べる時、“suspension”という言葉によって Hawkshaw がこの後男たちへの説得を断念してしまうことを先取りして暗示しているように感じられる。そして、昼間の光が埃に覆われる中で消えてしまって、疲れ切った埃に覆われた暗くなった広場の上では空が澄んでいたという情景を語る中で、「埃の棺衣 (a pall of dust)」や「経帷子を着せられて (shrouded)」といった言葉で死を暗示している。Towner と Carothers によると、“the twice-waxed moon”は“a not-yet-risen blue moon” (104) のことで、同じ月に出る二度目の満月のことを意味し、この物語は9月の終わり頃のことだと指摘している。Avia Venefica は、ネイティブ・アメリカンたちは満月に象徴的な意味を見出していると言う。“the twice-waxed moon”は9月の2度目の満月なので、10月の満月と考えられる。10月の満月のことを彼らは“Hunters Moon”と呼ぶそうだ<sup>8)</sup>。この場面では、Hawkshaw が McLendon たちを追いかけているのを満月によって表していると考えられる。ところが、Hawkshaw が McLendon たちと合流して車に乗って、製氷工場で夜警として働く Will を捕まえに行く時には、この月の様子は、“Below the east the wan hemorrhage of the moon increased” (177) と語られ、その満月の光はかすかな出血のような色を増している。この満月の光は、McLendon と Butch が Will を捕まえに行っている間待っている男たちを差している。この出血の色をしている満月は、リンチによって流すであろう血を暗示しているように思われる。そうならば、“a rumor of the twice-waxed moon” (175) は Hawkshaw が McLendon たちを追ひ、McLendon たちが Will を捕まえに行くことと共に、リンチが行われるであろうという噂のことを意味しているのではないだろうか。第1部の冒頭の噂の語り方に比べるとかなり示唆的なので、語り手はリンチの噂が広がっていることははっきりとは言わずに仄めかしているように思われる。

先に述べた満月の「かすかな出血の色」について述べた後に、語り手は自らの「観点」から主観を述べている。

It heaved above the ridge, silvering the air, the dust, so that they seemed to breathe, live, in a bowl of molten lead. There was no sound of nightbird nor insect, no sound save their breathing and a faint ticking of contracting metal about the cars. Where their bodies touched one another they seemed to sweat dryly, for no more moisture came. (177)

「かすかな出血の色」をした満月は、山の背の上に上って、空気や埃を銀色にしている。それで、

McLendon と Butch が Will を捕まえて来るのを待っている男たちは溶けた鉛の中で息をして生きていくように思われたと語られている。“seemed” は話し手の主観を表す言葉なので、ここには語り手の見方が表れている。つまり、これからリンチが行われるであろう時を待っている男たちは、辺り一面を銀色にする月の光に包まれており、それはあたかも現実ではなくて幻想の世界にいるかのように思わせているように語り手には思えたのだ。そして銀色の光の中で男たちの身体が触れ合うと、彼らはもはや湿り気が出てこなかったのでカラカラの汗をかくように思われたと語られる。この乾ききった状態は、まさにリンチが行われようとする一触即発の時に、人間性が失われてしまって狂気の域に入ってしまったことを語り手は暗示していると考えられる。この直後、McLendon と Butch が Will を連れて戻って来た時、待っていた男たちは集団で Will を殺そうとするが、McLendon に遮られて、車で別の場所へ移動することになる。

Hawkshaw は 1 人で車のところで待っていたのだが、語り手は彼の「視点」から、“He could feel himself sweating and he knew he was going to be sick at the stomach” (177) と語る。Hawkshaw はリンチが行われそうになったのを感じて、気持ち動揺して吐き気を催しているということ、語り手が代弁しているのだ。その場にいる男たちの名前を呼んで動こうとしない Will を車に乗せて、男たち全員も車に乗り込んでスピードを出して移動して行くが、Hawkshaw は彼らを止められないことを悟り車から飛び降りる。彼は埃に覆われた草の中を転がって溝の中に落ちる。2 台目の車が通り過ぎた後、彼はびっこを引きながら道路に戻って町へ向かって行く。その時の月の様子を語り手は次のように語る。

The moon was higher, riding high and clear of the dust at last, and after a while the town began to glare beneath the dust. (179)

埃 (dust) は第 3 部の至る所で言及されている。町の広場も通りも製氷工場の近辺も郊外へ続く道路も Hawkshaw が車から飛び降りた草むらも埃が覆っている。また、第 5 部の McLendon の家の裏のポーチの網戸にも埃がついている。上の引用では、月は前より空の高いところへ上っていて、ついに埃から離れている。前述の東の空の低いところにかかっていた「二度蠟引きした月」(175) や「かすかに出血の色をした」月 (177) とは違って、空の高いところで埃から離れて澄んだ光を Hawkshaw に注いでいると考えられる。彼は Will Mayes を助けることはできなかったが、自らの意思でその殺害現場へ行くことは拒否したのだ。しかし、町は依然として埃に覆われているので、埃はリンチ事件を覆い隠すものとして象徴的に使われているのではないだろうか。第 3 部の冒頭部分で、リンチ事件の噂が流れていることを示唆的に表現していると読み取ったが、ここでは町全体がそのことを知っていてそのことを埃が覆って隠しているかのようだ。だから、Hawkshaw が草の中にしゃがんで McLendon たちの車が町へと戻って行くのを見ていた時、埃は彼の車を呑み込んで、そこにしばらく漂っているが、まもなく「永遠の埃 (the eternal dust)」(180) が再びその埃を吸収してしまう。

第 5 部では、真夜中に家に戻った McLendon について語られている。彼の帰りを起きて待っていたはいけないと言っていたのにそれに逆らった妻に、彼は手荒い扱いをする。妻は眠れなかった理由を、“The heat; something” (182) と述べており、“something” が意味するのはリンチ事件に夫が関わったことを噂で聞いていたのではないかと考えられる。McLendon は家の裏の網戸を張った

ポーチで、噴き出る汗を脱いだシャツで拭き取って投げ捨てる。しかし、また汗が吹き出してくるので、シャツを探して再び拭き取る。彼は埃のついた網戸に身体を押しつけてあえいでいる。その時の彼の周りの情景を語り手は次のように語る。

There was no movement, no sound, not even an insect. The dark world seemed to lie stricken beneath the cold moon and the lidless stars. (183)

語り手は、McLendon に対しては決してその心情を説明することはない。リンチを犯した後の McLendon の様子をただ客観的に語るだけであるが、この最後の文には語り手の主観が書き込まれている。Edmond L. Volpe は、この最後の文を「神によって人間が見捨てられた感じ」(61) を伝えていると考えて、リンチを行う人間に対する絶望感を表す比喩と受け取っている。また、William B. Bache は、この文を「月の噂の勝利を示唆し、この物語の道徳的な前進を表している」(56) と考えている。月の噂とは、『『かすかな出血』によって夕方の血のような赤さを一掃する噂』(56) と説明されていて、結局、リンチという暴力を撲滅しようと人びとが語り出すことを暗示して、道徳的に前進することを示していると解釈している。この2人の考え方が正反対なのは、“the cold moon and the lidless stars” をどのように解釈するかによると考えられる。再び、ネイティブ・アメリカンたちが考える満月の象徴的な意味を参考にすると、彼らは12月の満月を“Cold Moon”と呼び、または、“Long Night Moon”とも呼ぶそうだ<sup>8)</sup>。12月の満月が象徴的に表す冬の寒さの厳しさと夜の時間の長さは、リンチという暴力が人間社会からなくなるにはまだ時間を要するかもしれないことを表し、長い夜の間ずっと輝き続ける星はいつかはそのような暴力がなくなるであろうという希望を暗示しているのではないだろうか。このように考えると、語り手は、この最後の文によって、McLendon が罪の意識に苦しんでいることを暗示しており、時間がかかるかもしれないがこのような暴力がなくなる日が訪れるであろうという希望があることを伝えようとしていると考えられる。

## 5. 町の人びとの視点を取り入れた語り

もう1つの話はその噂話の張本人と考えられている Minnie に纏わる話が偶数の部分で語られる。第2部の始めから半分位までは、“she” を主語にした文が立て続けに語られ、彼女は客観的に対象化されている。物語の現在38歳か39歳の彼女の空虚な日常生活がまず語られる。午前10時から11時の間にポーチに現れて、正午までブランコに乗り、昼食後夕方まで横になり、その後ボイルの服を着て女友だちと町の繁華街をぶらつく毎日の様子が語られる。そして、彼女が町の人たちにとってどのような存在であるのかを明らかにしていく。彼女はジェファソンでかなり裕福な家を出で、若い頃、まだ階級意識を持たない頃は町の社交界で注目の的であったが、周りの人たちが「紳士気取り(男性)と仕返し(女性)の喜び」(174) に気づき始めると、Minnie の意識と町の人たちの彼女に対する意識が食い違い出す。Minnie が「あの真実を激しく拒絶する困惑の様子を目に」(174) 浮かべた表情を“bright”と“haggard”を使って繰り返し言及している。そして、Minnie と銀行の出納係の話をするところは、町の人たちを客観化して町中の噂になっていた様子を伝えている。その語り方は、“A Rose for Emily” の語り手「私たち」が「町の人たち」を客観的に表現しているのとよく似

ている<sup>9)</sup>。その出納係がメンフィスの銀行に行ってしまった後、クリスマス毎にジェファソンの狩猟クラブの独身パーティにやって来る彼の様子を、独身の Minnie に話しに行く近所の人たちの目の描写にも “bright” が使われているが、こちらは好奇心に満ちた輝きで近所の人たちの悪意すら感じられる。

第4部は、男たちがランチに向かった第3部と同じ土曜日の夕方に、Minnie が女友だちと共に町に出かけて行く様子が語られる。彼女も女友だちも共に客観化して語られる。Minnie は熱があるにもかかわらず、透き通った下着やストッキングや新しいボイルの服を着て町へ出かける準備をする間、同行する女友だちは彼女の身体を気遣う言葉をかけるが、彼女たちの好奇心な目が輝いている様子も語られている。彼女たちが町の広場へやって来ると、男たちの好奇な眼差しや囁きも聞こえてくる。広場の様子がいつもと違うことに気づいた女友だちの様子が語り手の「観点」から語られる。

“Do you see?” the friends said. Their voices sounded like long, hovering sighs of hissing exultation. “There’s not a Negro on the square. Not one.” (181)

この地の文には話し手の主観を表す “sounded” が使われている。黒人たちが Minnie の流した噂を聞いていて、Will のような目に合わないように広場に1人も黒人がいないことを言う女友だちの声の調子を語り手が説明している。彼女たちの声は「長く尾を引いたしわがれた歓喜の溜息」のように、語り手に聞こえた。Minnie が流した噂の影響が出ていることを、彼女たちは面白がっているのだが、その気持ちを周りの人たちに気づかれないように抑えようとしているように聞こえたのだ。この頃には、McLendon たちが Will を捕まえに行ったという噂も流れていると考えられるので、白人社会でいかにランチが黙認されているかということが感じられる。

映画館の中の場面で、語り手が、Minnie の「視点」で彼女の気持ちを語っている箇所がある。それは、彼女たちが映画館に入って座席に着く前の彼女の様子を語っているところである。

Her lips began to tingle. In the dark, when the picture began, it would be all right; she could hold back the laughing so it would not waste away so fast and so soon. (181)

“it would be all right” の “it” は、彼女が自制することを指しており、セミコロンの後は、何を抑えるのかを具体的に述べている。“so it would not waste away” の “it” はその前の “the laughing” を指していると考えられるので、「この可笑しさがそんなに早く消え失せないように抑えておくことができるだろう」と彼女が考えているのを、語り手が語っている (Towner & Carothers 106)。John N. Duvall が指摘するように、Minnie は「彼女がもはや性的魅力がない (それゆえ、役に立たない) と彼女に伝える共同体の沈黙の主張が間違いであることを証明」しようとして、黒人に襲われたという噂を流し、再び「性的欲望の対象」となった (Duvall 129) と考えられる。「この可笑しさ」は自分の思い通りになった満足感であろうが、語り手は彼女がこの状況を楽しんでいることを伝えようとしている。Minnie は広場に向かって歩いている時から震えを抑えるように深呼吸していたが、その後も震えは止まらなくなっていた。映画が始まって、「神々しいほど若い」(181) 男女がカップルで何組も入ってきて、彼らの向こうで映画の「銀色の夢が積み重なっていった、必然的にどんどんと積み重なった」(181) 時に、Minnie は笑い出す。映画のスクリーンから映し出される輝きが “the silver



glare” (181)、“the screen glowed silver” (181)、“the silver dream” (181) のように言い表されるが、これは、第3部で「かすかな出血の色」をした月も空気や埃を銀色に染めて、男たちが狂気に走ろうとする状況を描いていた (177) 部分を思い出させる。「美しく、情熱的で、悲しい」(181) 虚構の世界を映し出すスクリーンの銀色の光と、もはや取り戻せない若者たちの若さと、Minnie の現実との大きな食い違いの中で、彼女の狂気の笑いは止まらなくなり、ついには金切り声に高まっていく様子が語られる。介抱する女友だちも、町の人たちと同じように、彼女を好奇の対象としてしか見ておらず、彼女が流した噂が引き起こす深刻な影響について言及することはない。町の人びとの視点を取り入れることによって、白人たちのリンチを黙認する意識も暗に描き出している。

## 6. 三人称の語りの効果

“Dry September” は、この作品が書かれていた時期に Faulkner が試していた語りの手法、会話中心の語り、象徴的な語り、町の人たちの視点を取り入れた語りを全知の三人称の語りの中で実践した作品である。全知の語り手を、物語世界には登場せずにその外側から語る「一人称」の語り手と考へ (ジュネット 286 - 87)、さらに、従来の「視点」を登場人物の「視点」と語り手の「観点」に分けて、それらの「視点」と「観点」から語り手が語っていると考へる (山岡 23 - 24) ことによって、語り手がこの物語を語る姿勢が見えてきた。

この三人称の語り手は、Hawkshaw を含んだ理髪師に近い位置から語っており、白人女性が黒人男性に襲われたという噂話を聞いてその真相を突き止めずに暴徒と化してしまう McLendon は客観的に対象化してその心情を語ることはない。それに対して、McLendon たちにリンチを思い止まらせようと行動するが、結局断念してその場から逃げ出してしまう Hawkshaw には語り手は寄り添っているように思われる。噂を流した Minnie に対しては、彼女自身がそれまで町の人たちの噂の的とされてきたことを町の人たちの視点を取り入れて明らかにし、彼女が映画館に入って着席するまでの間の彼女の意識を語ることによって、語り手は彼女が町の人たちに自らの存在を認めさせようとしたことを明らかにする。罪のない黒人を陥れてしまった Minnie の罪は逃れられないが、噂だけでリンチ事件が起こってしまうアメリカ南部の土壌の背景には、それを黙認する共同体の人たちの白人優位の意識があることを感じさせようとしている。

この作品に全知の三人称の語りを採用することによって、会話中心の語り、象徴的な語り、町の人たちの視点を取り入れた語りといった異なった種類の語り方を取り入れることに成功した。会話中心の語りでは、短い会話と簡潔な客観描写によってその場面の緊迫感を高めることができ、象徴的な語りでは、その場面の状況と登場人物の意識を一体化するような独特な雰囲気を出し出すことに成功している。また、町の人たちの視点を取り入れることによって、集合的な意識と共に、共同体の中で孤立していった時代についていけなかった女性の生き難さも表せたのではないだろうか。

### 注

- 1) Joseph Blotner はこの手紙に関する注の中で、この長編小説は *Flags in the Dust* であり、短編小説集は契約書の中で *A Rose for Emily and Other Stories* と呼ばれていたもので、1931 年に出版された *These 13* のことであろうと推測している (Blotner 35)。
- 2) Michael Millgate によると、題名が “Drouth” から “Dry September” に変更されたり、登場人物の名前

が変更されたり、最初の2つの部分が入れ替えられたり、削除された文章もあるが、三人称視点の語りは変更されていない(262-63)。尚、テキストは、*Collected Stories of William Faulkner* を使用している。本書からの引用は括弧内に頁数のみを示す。引用文の訳は『これら十三篇』(林 信行訳、富山房、1968年)を参考にした。

- 3) Millgateによると、“A Rose for Emily”は、タイプ原稿から Miss Emily と黒人召使いの会話が削除されているが、一人称複数形の語りは変更されていない(263 - 64)。
- 4) Skei も、“As I Lay Dying”の17ページのタイプ原稿は、対話体が物語を通して使われていることを述べている(47)。*William Faulkner: Manuscripts 15. Volume 1 (A Garland Series)* (1 - 17) 参照。
- 5) *Uncollected Stories of William Faulkner* に収録されている“Once Aboard the Lugger (I)”(352 - 58)では、密輸船の乗組員の一人である「私」が、ニュー・オーリンズから目指して行った島で、アルコールを掘り出して運ぶ状況を語る事が中心になっており、最初の原稿とは描き方が違っている。
- 6) “Idyll in the Desert”のタイプ原稿は *Uncollected Stories of William Faulkner* (399 - 411) に収録されているものと変わらないと考えられる(小山 293 - 96・403)。
- 7) ジュネットは、ガイウス・ユリウス・カエサルの『ガリア戦記』(國原吉之助訳、講談社学術文庫、1994年)を例外として挙げている。この本の中で自己に言及する時は、「カエサル」または三人称で書かれている。
- 8) “Symbolic Native American Full Moon Names”  
<http://www.whats-your-sign.com/native-american-full-moon-names.html> 参照。
- 9) 拙論「語り手「私たち」の展開する物語性について—ウィリアム・フォークナー「エミリーへのバラ」』『境界』で読む英語文学—ジェンダー・ナラティブ・人種・家族』(開文社出版、2005年)で“A Rose for Emily”の語り手「私たち」を分析している。

## 引用文献

- Bache, William B. “Moral Awareness in ‘Dry September.’” *Faulkner Studies*. 3 (1954): 53-57.
- Blotner, Joseph, ed. *Selected Letters of William Faulkner*. New York: Vintage Books, 1977.
- , ed. *Uncollected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage Books, 1981.
- Duvall, John N. *Faulkner’s Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities*. Austin: U of Texas P, 1990.
- Faulkner, William. *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage Books, 1977.
- Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. Athens and London: The U of Georgia P, 1963.
- Skei, Hans H. *William Faulkner: The Short Story Career*. Oslo: Universitetsforlaget, 1981.
- Towner, Theresa M. and James B. Carothers. *Reading Faulkner: Collected Stories*. Jackson: UP of Mississippi, 2006.
- Venefica, Avia. “Symbolic Native American Full Moon Names.”  
<http://www.whats-your-sign.com/native-american-full-moon-names.html>
- Volpe, Edmond L. “‘Dry September’: Metaphor for Despair.” *College Literature* 16. 1 (Winter 1989): 60-65.
- 小山敏夫『ウィリアム・フォークナーの短編の世界』山口書店、1988年。
- ジュネット、ジェラルド『物語のディスクール—方法論の試み』花輪光・和泉涼一訳、水声社、1985年。
- 山岡實『「語り」の記号論—日英比較物語文分析(増補版)』松柏社、2005年。

(同志社大学嘱託講師)